

「座標軸となる知識」の定着を見届けましょう

1 座標軸となる知識

「座標軸となる知識」とは、次のようなものです。ここでいう知識は、知識を広くとらえたもので、知識、技能、考え方、態度を含む概念です。

「座標軸となる知識」とは

これなしでは、今後の社会科に関する学習が積み重ねられない

これなしでは、実生活をする上で、現在及び将来的に支障をきたす

これなしでは、現在起きている重大な社会的事象に対して関心がもてない

生徒は、生涯にわたって学習を積み重ねていきます。「座標軸となる知識」は、生涯にわたる学習の積み重ねをするための基礎となるものですから、極めて大切です。

今までの社会科指導を振り返ってみると、義務教育終了までに将来必要な知識の多くを習得させようとしてきました。また、豊富な知識を関連付けて活用している教員の知識観をそのまま生徒に当てはめ、基礎・基本は知識であると考え、結果として、膨大な事実に知識を注入することが大切だという指導観に陥る傾向がありました。

生徒は生涯にわたって学習を積み重ねていくものであり、その基礎としての「座標軸となる知識」という視点から社会科学習を見直し、従来の方法に改善を加えていきましょう。

「座標軸となる知識」は、社会科で多く登場する「事実に知識」とは区別して、すべての生徒が必ず身に付けられるように、より丁寧な指導が必要です。

2 例題や演習問題を取り入れた指導の必要性

地形図の縮尺、地図の子午線や時差、気候区分や雨温図に関する知識は、社会科の内容を正しく理解していくために必要なものであり、実社会に出ても学習の基礎として活用していく「座標軸となる知識」です。

特に、技能に関わる事項を理解させるためには、数学の授業のように例題や練習問題を取り入れた授業が効果的です。次ページの事例1のように、例題で教師が説明して基本的なものを理解させ、練習問題でその理解を確認したり、応用力を身に付けさせたりします。

多くの社会科の授業は、生徒に課題を解決させながら、生徒自らが気付くことを大切にしているといえるでしょう。しかし、本県の現状を踏まえると、大切なことを教師が丁寧に教え、理解を促し、理解を確認していく指導過程も多くの場面で取り入れられるべきものと思われます。

【事例1】

例題や演習問題を取り入れたワークシート（抜粋）

二万五千分の一の地形図上の距離から、実際の距離を計算してみよう。

考え方の基本	実際の距離	=	地図上の距離	×	縮尺の分母
単位の基本	1 m	=	c m		
	1 Km	=	m	=	c m

【例題】

1 中学校と自宅の直線距離

(1) 地図上の距離は？ _____ c m

(2) 縮尺は？ _____

(3) 計算式は？ _____

(4) 答えは？（単位も含む） _____

【練習問題】

2 中学校と小学校の直線距離

式 _____ c m × 25000 = _____ 答え _____（単位まで書く）

3 中学校と 駅の直線距離

式 _____ c m × = _____ 答え _____（単位まで書く）

【応用問題】 ここからは自分で問題をつくって計算してみましょう。

4 () と () の直線距離

式 _____ c m × = _____ 答え _____（単位まで書く）

3 毎時間、繰り返し指導することの必要性

日々の授業の学習活動を成立させている基本的な事項は、「座標軸となる知識」です。例えば、地図を活用する知識や技能、統計資料や具体事例で確認する態度、図表を読み取りの知識や技能、地域的特色をとらえていく方法、学習課題を考えていく方法、話し合いの仕方、課題をまとめる技能等です。このような事項の重要性を改めて認識し、生徒が身に付けられるように、意識的に、毎時間指導していきましょう。

4 長い期間で、繰り返し呼び起こす指導の必要性

教師は「理解させる」という言葉をよく使用します。しかし、生徒が理解できる状態になれば、理解させることはできません。理解は教師からの一方的な働きかけだけではなく、生徒の実態と教師の働きかけの両者があって、成立するものです。

ですから、教師が一度教えたとしても、それで理解できない生徒がいることは、当然のことです。そこで、「期間をおいての繰り返し指導」が重要になります。例えば、都道府県や主な国の名称や位置、時代区分、気候区分等の「座標軸となる知識」については、このような指導が必要不可欠です。

大部分の中学校には数ヶ月間隔の定期テストがあります。定期テストを計画的に活用するなどして、「期間をおいての繰り返し指導」を工夫していきましょう。